起業めざし アイデア続々

県内の大学生らが起業アイデアを競う「崇城大学ビジネスプランコンテスト」が16日、熊本市西区の崇城大で開かれた。事前審査を勝ち抜いた８組が、熱くプレゼンテーション。視覚障害者に人や障害物の接近などを音で知らせる補聴器型装置を提案した崇城大生２人組「ゆーず」が優勝し、賞金50万円を手にした。

崇城大コンテストで「ゆーず」優勝

視覚障害者の支援装置 提案

若者の起業への意欲や挑戦心を育てようと、崇城大と県が毎年開いており４回目。76組の応募があり、書類と面接による審査を通過した崇城大５組、県立大２組、熊本大１組が最終審査に臨んだ。

審査員は大学発のベンチャー支援に詳しい東京大教授の各務茂夫（かがみ）イノベーション推進部長のほか、ＩＴ起業の経営者ら10人。学生たちに与えられたのは７分間で、大型スクリーンに資料を映しながら多彩な発想を次々と披露した。

県内の大学生８組が最終審査に臨んだビジネスプランコンテスト

ゆーずは、崇城大の起業部に所属する工学部２年の藤岡夏葵（なつき）さん(20)と情報学部２年の荒木雅樹さん(19)。

高校時代、地元の大牟田市で視覚障害者が横断歩道の前で「一緒に渡ってください」というカードを掲げる姿を目にしたことがあるという藤岡さんが、補聴器型装置のコンセプトを発案。コンセプトを具体化するため、情報通信技術などを学ぶ荒木さんに協力を求めた。

２人は、コウモリやイルカなどが周囲に音を発し、その跳ね返りで空間を認識したり、コミュニケーションしたりする「エコーロケーション」の仕組みに注目。補聴器型の装置に車の衝突安全技術にも応用されているセンサーを搭載し、検知した状況を視覚障害者に音階などで伝えるアイデアを提案した。

表彰式で優勝の賞状を掲げる「ゆーず」の藤岡夏葵さん（前列左）と荒木雅樹さん（同中央）。右は崇城大の中山峰男学長＝熊本市西区

「装置は、白杖（はくじょう）や盲導犬などに替わるもの。視覚障害者の日常の〝景色〟を変えたい」と訴えた藤岡さん。競合商品が見当たらないことも強調した。

審査員からは「法的な認可の必要性はあるか」「使いこなすにはトレーニングが必要なのではないか」などの厳しい指摘が出る一方で、「（特許出願など）権利化を考えたほうがいい」「技術的な確証がある」などの高評価も相次いだ。

藤岡さんは表彰式で「優勝できるとは思っていなかったので驚いている。前年優勝者として来年のコンテストまでには試作品を披露したい」と喜びと決意を述べた。

コンテストでは、近年人気の「クラフトビール」の情報を愛好家で共有するアプリケーションの開発と販売、野菜の機能性を高める光合成細菌を使ったトマトの水耕栽培なども発表された。審査委員長の各務教授は「どのプランにも可能性を感じた。技術的に詰めなければいけない点や壁を乗り越えてほしい」と講評。学生たちのさらなる努力に期待した。

（隅川俊彦）

編集後記

崇城大学ビジネスプランコンテストの前年優勝チームは、全国規模の大会でも最優秀賞を受賞しています。今回、学生の発表やベンチャービジネス界の最前線にいる審査員の批評を聞き、その熱量に感心すると同時に、互いに刺激し合っているようにも感じました。「イノベーションは人伝いに起きる」。審査委員長の言葉が印象に残りました。（隅川俊彦）

2017年12月22日　熊本日日新聞　P.12